

氏 名：小 村 三千代

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 3 2 号

学位授与年月日：平成 2 0 年 3 月 1 8 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：筋ジストロフィー病棟における看護師と患者の相互作用

INTERACTION BETWEEN NURSES AND PATIENTS AT
A MUSCULAR DYSTROPHY WARD

論文審査委員：主査 筒 井 真優美

副査 武 井 麻 子

副査 濱 田 悦 子

副査 守 田 美奈子

副査 平 澤 美恵子

論 文 内 容 の 要 旨

小児医療の著しい進歩のもと、小児期に発症し障害を抱えて成人年齢に達した患者が増加しており、今後も増え続けていくことが予想されている。筋ジストロフィー（Muscular Dystrophy）は、小児難治性疾患の中で最も重篤とされている進行性の予後不良疾患であり、病気の進行を背景に患者の不安が増大していることや、重症化する患者への看護師のケア負担、心理的ストレス状態などが問題化してきており、看護の難しさが指摘されている。しかし、看護師や患者の間で何が生じているのか、それらに関する研究はほとんどなく、課題解決に向けた取り組みが求められている。本研究はその取り組みの一つであり、看護師患者間で起こっていることを明らかにし考察することで、筋ジストロフィー看護の質向上の一助になると考えられる。

【研究目的】

筋ジストロフィー病棟における看護師と患者との言語的・非言語的交流の様相を通して、看護師と患者にみられる相互作用を明らかにする。

【研究方法】

関東圏内にある総合病院の筋ジストロフィー病棟において、参加観察とインタビューに基づくエスノグラフィーの方法を用いた。研究参加者は、研究の同意が得られた看護師男女合わせて 18 名、筋ジストロフィー患者 20 名、患者の母親 3 名であった。看護師の筋ジストロフィー看護経験年数は 1 年から 13 年、年齢は 20 代から 50 代であった。患者の年齢は 20 代から 60 代、入院期間は 1 年から 25 年であった。参加観察やインタビューより得られたデータの中で、繰り返しみられるテーマやデータの意味について分析した。

【倫理的配慮】

研究の趣旨について説明し、研究参加の同意を得た。研究参加者には、研究への参加は自由であること、拒否や途中辞退が可能であること、話したくない内容は話さなくてもよいこと、そう

することによる不利益は一切生じないことを予め伝えた。得られたデータに関しては、個人が特定されることがないよう配慮し、本研究以外には使用しないことを保証した。希望者には、結果を配布することを伝えた。また、日本赤十字看護大学の研究倫理審査委員会と、研究施設の倫理委員会へ研究計画書を申請し、承認を得た。

【結果】

患者は話をすることはできたが、生活のすべてにおいて看護師の介助を必要としていた。看護師は日勤が約 5、6 名、準夜深夜勤とも 3 名で 40 名の患者をケアしていた。

1. 病棟の沈黙の底に潜む看護師と患者の相互作用

ひっそりと静かに感じられた筋ジストロフィー病棟において、看護師と患者のやり取りは、交わす言葉こそ少ないがお互いの動きやタイミングが微妙に絡み合い一つに重り、そこには「あ・うんの呼吸」があった。また、看護師と患者は、お互いの意思を「暗黙に了解」しているかのようにな少ない言葉で伝え合い、お互いに通じ合っていた。しかし、週 2 日ある入浴日だけは、お互いに言葉こそ交わさないが人工呼吸器を装着している患者を含む 20 名を入浴させる看護師にとって、普段の静けさを破る「戦いのとき」であり、湯船につかっている患者には「至福のとき」となっていた。長い年月の積み重ねの中で育み、培ってきた看護師と患者のやり取りは、静かな沈黙の世界を生み出していた。

2. 言語を介さずに患者の意図を汲む看護師の见えない働き

看護師は、患者と言葉を交わさなくても自らの感覚を働かせ、患者が意図することを汲み取り働きかけていた。しかし、これらのことは目で見ることや捉えることの難しさをあわせ持っていた。看護師は身体感覚を働かせ、息苦しさを訴える患者の背中にそっと両手を差し入れることで、息苦しさが和らぐ一瞬を与えていた。また、看護師は様々な音が行き交う病棟の廊下を走りながら病室内にいる患者の、あるいは同室の他患者の介助をしていても気管内吸引を必要としている患者の呼吸音を聴き分けていた。さらに看護師は、気管切開下で人工呼吸器を着け、身体が屈曲硬縮した状態で 24 時間臥床している患者が感じている身体感覚をイメージして感じ取り、「楽」な形に創り上げていた。

3. お互いに踏み込むことができない領域

看護師と患者には、お互いに踏み込むことや触れることのできない領域があった。看護師も患者も、患者の足の指先の動きから核心には触れないように気づかいながら、それぞれが病気の進行具合を確かめ合っていた。「来年の桜は、見られないかも・・・」と、死のことには触れずに暗に死をほのめかした医師のつぶやきは、患者が人工呼吸器の装着を決断する決め手になっていた。患者は、看護師に呼吸器装着の話を持ち出してみたが、看護師はその話には一言も触れようとはせず、話題を逸らしていた。しかし、僅かではあるが、患者から申請者に死について語り始めようとする兆しが見え始めていた。

【考察】

看護師と患者が言葉少なに、あるいは言語を介さずにやり取りしていた背景には、身動きできずに硬縮した身体で臥床している患者が感じている身体感覚の痛みや痺れなど、言葉にして表現することが難しい身体感覚であったことや、その感覚を感じ取る「共通感覚」という技を看護師が身につけていたこと、小児期からの入院生活の中で言葉を用いなくても通じ合う関係にあったことが考えられる。少ない言葉で通じ合うことができる看護師と患者の関係は、看護師と患者に気

づかいと甘えを生じさせ、それと同時に、その気づかいや甘えが言葉にして核心に触れることをお互いに避けようとする関係へと向かわせていた。また、言葉として語られなかった多くの沈黙の中には、運動機能が徐々に失われていくキャリーオーバーした患者をケアする看護師の苦悩や、動けなくなっていく患者の不安が隠されていた。しかし、患者が死について語り始めるという変化が見られたので、看護師と患者がお互いに歩み寄ることにより関係が深まると考えられる。

論文審査の結果の要旨

筋ジストロフィー病棟における看護師と患者の相互作用についての研究はこれまで行われておらず、その点において、本研究は長期にわたってフィールドに入り込み、言葉による交流が少ない看護師や患者と直接かかわりながら観察を続け、分析しているところが高く評価される。また、自ら動くことができない筋ジストロフィー患者が求めている「楽」な身体の姿勢や位置を、看護師が自らの身体感覚を統合して感じ取り、イメージし、その形を創り上げるということが具体的に明らかにされており、このことが本研究のオリジナリティといえる。

専門委員会では、本論文の論旨が明確であること、先行文献が十分読み込まれていることが評価された。本論文において、申請者は豊かな表現力をもって筋ジストロフィー病棟における看護師と患者の相互作用を描き出すことに成功している。研究結果においては、意識が明瞭で話をするのできる患者と忙しい看護師との交わす言葉が少ない、あるいは見過ごされやすい看護師と患者のやり取りを詳細に捉え、実際の事例を豊富に提示しながら論理展開した記述は、十分説得力に富むものであった。

さらに考察では、看護師と患者との相互作用において交わす言葉が少なくなっていく背景として、身体感覚を言語化することが難しいことや、幼少期から入院している患者と看護師が通じ合う関係や甘えの関係にあること、お互いに踏み込めない世界があることが論じられている。これらは、筋ジストロフィー看護においてこれまで明らかにされてこなかったことから、看護師の患者へのかかわり方において重要な示唆を提示していると評価できる。

審査の中では以上の評価を踏まえたうえで、看護師が語らなくなっていく背景として語りたいが語れない看護師のもどかしさについて議論がなされ、その現状を分析し考察を深めていくことが勧められた。さらに、これまで口を閉ざしていた死について患者が申請者に対して語り始めたことに注目し、これらのことを含めた筋ジストロフィー患者への看護の提言を、今後検討することが提案された。

以上の論点を踏まえ、博士学位論文審査専門委員会では、本論文を学位規程第3条第3項に定める博士(看護学)の学位論文としてふさわしい水準にあると認め、「合格」と判定した。